2021 年 7 月　第 19 巻 第 7 号

かく語りき－聖人の言葉

何かを知りたいという欲求が心に生じたら、誰もいない場所で一人、目に涙を浮かべながら神に祈りなさい。神はあなたの心からすべての汚れと悲しみを取り除き、すべてをあなたに分からせてくださいます。
…ホーリー・マザー・シュリー・サーラダー・デーヴィー

私から心を離さず、瞑想を通して私を礼拝する、そのような敬虔な人々に、私は富を与え、すでに持っているものは失わないようにと、面倒をみる。
…シュリー・クリシュナ

今月の目次

・かく語りき――聖人の言葉
・お知らせ
・2021 年 8 月、9 月の生誕日
・2021 年 6 月逗子リトリート
お釈迦様生誕祝賀会　午後の部
「ゴータマ・ブッダ」
スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダ
・スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕記念祝賀会　基調講演
「スワーミー・ヴィヴェーカーナンダと日本」　パート 2/2
谷口智彦博士　慶応義塾大学教授
・スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕記念祝賀会
新刊リリースに関する著者の言葉
「日印関係の話」
スワーミー・メーダサーナンダ
・スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕記念祝賀会　来賓講演
「ネタージ・スバース・チャンドラ・ボシュとインド独立運動を支えた日本人志士たち」　パート 2/3
田中健之氏　岐阜女子大学南アジア研究センター特別研究員
・忘れられない物語
・今月の思想

～お知らせ～

コロナウイルスの影響のため、引き続きライブストリーミングやズームなどの配信を中心に、皆様にお届けいたします。　ズームに関するお問い合わせ、

お申込みは下記にメールをお送りください。
zoom.nvk@gmail.com

8、9 月の生誕日

ｽﾜｰﾐｰ･ﾗｰﾏｸﾘｼｭﾅｰﾅﾝﾀﾞ	8 月 6 日（金）
ｽﾜｰﾐｰ･ﾆﾗﾝｼﾞｬﾅｰﾅﾝﾀﾞ	8 月 22 日（日）
ｼｭﾘｰ･ｸﾘｼｭﾅ ｼﾞｬﾝﾏｰｼｭﾀﾐ	8 月 30 日（月）
ｽﾜｰﾐｰ･ｱﾄﾞｳﾞｧｲﾀｰﾅﾝﾀﾞ	9 月 6 日（月）
ｽﾜｰﾐｰ･ｱｳﾞｪﾀﾞｰﾅﾝﾀﾞ	9 月 30 日（木）

＊日本ヴェーダーンタ協会の行事予定はホームページをご確認ください。
https://www.vedantajp.com/

2021 年 6 月逗子例会
午後の部

［6 月号ではヴェーダーンタ協会のゴータマ・ブッダ生誕祝賀会に関する情報をお知らせしました。
以下は、祝賀会の午後のセッションでスワーミー・ディッヴィヤーナターナンダジーがお話しされた内容です］

ゴータマ・ブッダ
スワーミー・ディッヴィヤーナターナンダ

「ブッダ」という言葉は「目覚めた人」または「悟った人」という意味です。世界の多くの人々の人生に影響を与えた東洋の最も偉大な預言者の一人であるゴータマ・ブッダは、シュッドーダナ王とそのお妃マーヤー・デーヴィーの間にシッダールタとして生を受けました。シュッドーダナはカピラヴァストゥ国のシャーキヤ族（釈迦族）の王でした。世界の師の生誕は一般的な現象ではありません。他の預言者の生涯と同じように、ブッダの両親は偉大な預言者が家族としてやってきたことについて、超自然的なヴィジョンを見ました。ブッダの生誕以前にも、マーヤー・デーヴィーは白い象が自分の身体の中に入るヴィジョンを見ました。そのヴィジョンのすぐ後に彼女は赤ちゃんを宿しました。そしてある日、彼女の生まれ故郷の村ルンビニに行く道中でゴータマが生まれました。

神の計画

ある占星術師が、若いゴータマが世俗の世界に残れば偉大な王に成長するだろう、しかしもし彼が宮殿の快適さを棄てるなら、偉大な賢者、人類の救世主になるだろうと予言しました。生まれてから 7 日間のうちに母マーヤー・デーヴィーが亡くなったので、ブッダはその妹ゴータミに育てられました。父親であるシュッドーダナは占星術師の預言を心配しました。シュッド

ーダナ王は息子の生活を可能な限り快適で楽しいものにしようとしました。なぜならゴータマは人間の苦しみを経験することでこの世を放棄するかもしれない、と恐れたからです。そのためにシュッドーダナ王はゴータマを美しく若い女性のヤショーダラーと結婚させました。

しかし、神のご計画は王のものとは違っていました。ゴータマは生まれつき思慮深く、幼少期の母親の死はすでに彼の心に空虚感をいだかせていました。ゴータマは、自分はあらゆる種類の快適さと楽しみに囲まれているがこの世のすべての幸せは一時的なものではないのか、それとも永遠の至福を与えてくれるのだろうか、としばしば熟考を重ねました。ある日、御者であるチャンダカとともに、二人は馬車に乗り宮殿の城壁の外に思い切って出かけました。ゴータマはその時初めて、杖に頼ってよたよた歩く老人を見ました。「チャンダカよ、彼は誰か」とシッダールタ王子は尋ねました。

「彼は老人でございます。私たちはみな、いつかは老いるのです」とチャンダカは言いました。

しばらく行くと若い王子は、がりがりに痩せ悲惨なようすで力なく突っ伏しているもう一人の男を見ました。「チャンダカよ、なぜ彼はこんなところで横になっているのだい？」

「あの男は病気でございます。誰もが病気になる可能性があります」とチャンダカは答えました。
それからゴータマはまたべつの男の身体を見ました。その身体は生きているようには見えませんでした。数名の男たちがその身体を肩に担いで運んでいました。チャンダカは説明しました。

「肩に担がれているのは死人でございます。人間は誰しもいつかは死ぬ運命です。彼の肉体は火葬するために運ばれているのです」

最後にゴータマは神々しい顔をした黄土色の衣をまとった人がお椀をもって下を見ながら歩いているのを見ました。チャンダカは言いました。「この人は出家者でございます。彼は生死を超越するために人生の快適さを放棄しております」

王子、家を棄てる

この三つの光景はゴータマに深い印象を残しました。出家者の光景は彼の心に放棄という考えを起こさせました。ゴータマが宮殿に戻る途中、彼は息子が生まれた知らせを受けました。このことは彼の思慮のターニングポイントとなりました。彼は自分の人生にさらなる束縛ができたと結論づけ、密かに宮殿を去ることにしたのです。

チャンダカを含む五名の従者は、ゴータマの信者となるために一緒に出掛

けた、と言われています。まずゴータマは当時の数名の大師の許へ行き、その指導の下で霊的な実践をしましたが、彼らの教えでは自分の渇きをいやすことはできませんでした。最後に彼は自力で真理を悟ろうと、瞑想と厳しい苦行をしました。ゴータマは六年間厳しい修行をしましたが、まだ目標を達成していませんでした。彼の身体はひどく痩せこけてやつれていました。ある日、スジャータという地元の村の乙女がゴータマにミルク粥をお供えしました。スジャータがお供えした食べ物を食べると、ゴータマはエネルギーを取り戻し、再び最高の霊性の知識を得ようと決意しました。そしてついに三十五歳の恵まれた日に彼は悟りを得て、ブッダとなったのです。ブッダとなった彼は、すべての人間の苦しみが消え、喜び、痛み、幸福、悲しみにも影響されない心の状態に達しました。

四つの聖なる真理　（四諦）

　そして苦しんでいる人びとに対する思いやりから、ブッダはすべての人のためにご自身が得た知識を説くことを熱望しました。ブッダは、ご自身が乙女からのミルクを受け取ったことから、かつてブッダの許を去った 5 人の弟子のところへ行きました。弟子たちはブッダが話されるのを聞いて、ブッダが非常に高い状態に達したと確信し、再びブッダを師として受け入れ、改めて弟子になりました。ブッダはダルマ、つまり四つの聖なる真理（四諦）を彼らに説きました。それはベナレスの近くのサルナートでのことでした。

　輝かしい状態の中で、ブッダはこの『四諦』を悟りました：

・第一の真理（苦諦）
人間の生命は苦しみに満ちている。 生まれてから死ぬまで、人間はさまざまな形で苦しみを受ける。

・第二の真理（集諦）
これらの苦しみの背後には原因がある。トリシュナ、世俗の楽しみに対する渇愛（渇きや欲望）が苦しみの原因である。

・第三の真理（滅諦）
私たちの苦しみは終わらせることができる。すべての欲望を放棄することで可能となる。

・第四の真理（道諦）
欲望が滅びたときに人は悟りを得て、すべての苦しみは止む。極端な苦行は必要なく、贅沢に溺れてもいけない。それよりも中道を歩むこと。中道が人の欲望の終焉へと導く。

平和に伝道する

　ブッダがラージグリハ国の町へ行くと、ビンビサーラ王から温かな歓迎を受けました。ブッダがラージグリハ国

からコサラ国へと移ると、コサラ国のプラセナジト王はブッダの弟子となりました。ブッダは父であるシュッドーダナ王が治めるカピラヴァストゥ国へと向かいました。そしてブッダの家族は妻も息子もみな、ブッダの信者になりました。

45 年間、ブッダは弟子たちと共に教えを説くために諸国を行脚しました。王様、偉大な学者、そして庶民が同じようにブッダの信者となりました。さらには残虐な盗賊アングリマーラや遊女アンバパーリーも彼の御足に平伏し、彼の教えを受け入れました。

ブッダの生涯と教えの特徴の一つは、ブッダは、神、預言者、救世主について説かなかったことです。ブッダの教えでは、宗教の正当性や儀式にはあまり価値を置かず、その代わりに倫理［人として守り行うべき道］を強調しました。そしてまた仏教は、ゆっくりと、力づくで改宗させることなく、広がっていきました。仏教はどこにおいても平和の旗の下で大きくなったのです。

ゴータマ・ブッダの生涯に関するいくつかの興味深い逸話があります。 それらはブッダの教えの偉大な智慧が反映されているので、ここでいくつかをご紹介します：

みな必ず死ぬ

ブッダがあるところで弟子たちに囲まれて休んでいると、悲しみに打ちひしがれた女性がブッダに会いたいと言って近づいてきました。彼女はたった一人の子供を亡くし、ブッダの祝福を求めて彼のもとへやってきたのです。その女性はキサー・ゴータミーという名前でした。その頃にはブッダの名声は遠く広がっていました。キサー・ゴータミーは、亡くした子供を生き返らせる力がブッダにはある、と信じ込んでいました。最初ブッダは彼女の悲しみを和らげてから、生きている者は遅かれ早かれいつかはみな死ななければならないことを納得させようとしました。しかし、キサー・ゴータミーはブッダの力を信じていたので簡単にはブッダの許から離れることはできませんでした。

「分かりました」とブッダは言いました、「どの家からでもいいので一握りの辛子粒を持ってきてください」。それを聞いたガウタミは、おそらくブッダは辛子粒を子の身体に振りかけ、ブッダの力でその子が生き返るのだろう、と思って喜びました。ブッダは続けました「しかし」、「これまでに死者の出たことのない家から集めてきてください」　ガウタミは必死に家々をまわり、死が一度も入ったことがない家を探しましたが、そんな家はどこにもありませんでした。次第に彼女は息子がもう自分の許へは戻ってこないこと

に気づき始めました。生の厳しい真実が分かり始めました。ブッダはガウタミに、生あるものは必ず死ぬということを理解させたかったのです。

大事なことと大事でないこと

多くの場合、私たちは大事なこととそうでないことを混同し、大事でないことが自分にとってより重要であると思うこともあります。大事なことにフォーカスすることの重要性を分からせるために、ブッダは次のような逸話を語りました：

・毒矢に刺されたとします。そのときあなたは矢を放ったのが男か女かを見極めることから始めますか？　誰がその矢を放ったのか？　矢の毒の成分は何か？　矢を放った弓は竹製かそれとも木製か？　もし矢を受けたときにそのようなピント外れのことから探し始めれば、もっと具合が悪くなるだけです。賢い人は無意味な議論を追求する代わりにまず矢を抜き、傷口を治すために必要な薬を探します。

同じように、私達も自分の人生において苦しみがあることを認めましょう。そしてその苦しみの原因とそれに対する対処法を見つけるのです。

農夫ブッダ

・ある日、ブッダが托鉢に出かけると、豪農バーラドヴァージャに出くわしたので施しを乞いました。バーラドヴァージャは托鉢をしている者を見てあまり喜ばず言いました、「私は農民です。肥沃な土地に種をまき、良い収穫をしています。あなたも私と同じように農業で生計を立てれば托鉢に出る必要はなくなります」。

ブッダは答えました「私も農夫です。信仰という種をまきます。良い行いが肥料となる雨です。智慧と慎み深さが私の鋤です。心が手綱です。私は法というハンドルを握っています。熱心さが鍬棒です。努力が荷車用雄牛です。これらで幻想という雑草をなくすために耕します。収穫はニルヴァーナの不滅の果実で、そこですべての悲しみは終わります」。　その智慧に満ちた言葉を聞いて、バーラドヴァージャは金の鉢にミルク粥を入れてブッダに捧げました。

ブッダ、戦争を防ぐ

・ある時ブッダは二つの隣接する王国が、土手の所有権のことで戦争の危機に瀕していることを知りました。ブッダが到着したとき、両国はすでに臨戦態勢に入っていました。ブッダは尋ねました。「この土手には内在する価値があるのですか、あなたの家来の役立つ奉仕よりも？」

「いいえ、それには内在する価値はございません」という答えが返ってきました。

「そうなんですか？　戦争が勃発すれば多くの人が死に、あなたたち王もまた死ぬかもしれないのですよ」

「はい、そうかもしれません。戦争では多くの人が殺されるでしょう」

「人の命よりもこの土手が大事なのですか？」

「おっしゃるとおりです」

「そうであれば、この戦争はやめた方がいいのではないですか？」とブッダは尋ねました。

すぐにどちらの当事者も自分の過ちに気づき、戦争は回避されました。

識別の訓練

・ある時、肥満で病気がちの金持ちの男がブッダのもとにやってきて言いました。偉大なお方様、どうかちゃんと敬礼できないことをお許しください。私はいろいろな病気で苦しんでいます。私はこの状態から回復したいので、どうすればいいか教えてください。

「食べすぎ、寝すぎ、働かないことが肥満の原因です」とブッダは言いました。「もしあなたが本当に回復したいのなら、食欲を抑制し、睡眠を減らし、身体を使う仕事を始めなさい」

金持ちの男はブッダの教えに従って、肥満から回復しました。男がブッダにもう一度会うためにやってきて言いました。「偉大なお方、あなたは私を身体的な病気からお救いくださいました。どうぞ私の心を世俗から解放してください」

ブッダは言いました。「世俗的な人は肉体に栄養を与えるが、思慮深い人は心に栄養を与えます。贅沢にふける人は自己を破壊しているようなものです。識別を働かせなさい」

誠実で正しい使い方

・ウダヤナ王の妃シャマヴァティーが五百着の衣をアーナンダ（ブッダのお気に入りの弟子）に供養したとき、アーナンダはこれを快く受け入れました。これを聞いたウダヤナ王は、アーナンダが不誠実なのではあるまいかと疑いました。王はアーナンダを訪ねて聞きました。「五百着の衣を一度に受けとってどうされるのですか？」

アーナンダは答えました。「多くの兄弟弟子はぼろ布を身にまとっているので、この衣を分けます」

「それではこれまでの布はどうしますか？」

「敷布を作ります」

「古い敷布はどうしますか？」

「枕カバーにします」

「古い枕カバーはどうしますか？」

「床の敷物に使います」

「古い床の敷物はどうしますか？」

「足ふきを作ります」

「古い足ふきはどうしますか？」

「雑巾にします」

このようにアーナンダは全く不誠実ではないことが証明されました。

ブッダに関するヴィヴェーカーナンダの言葉

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはブッダを非常に崇敬していました。1900 年 3 月 18 日、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダはサンフランシスコでゴータマ・ブッダに関する演説をしました。それは後に『ブッダの世界へのメッセージ』としてスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのコンプリート・ワークスに収められました。

・ヴィヴェーカーナンダは言いました。「私はずっとブッダのことが大変好きでした。その大胆さ、その恐れのなさ、その途方もない愛、という性質において他の誰よりも崇敬しています！彼は人々への善のために生まれました。自己のために神を求める者、真理を求める者はいます。しかしブッダは自分のために真理を知ることなど気にもかけませんでした。彼は人々が悲惨な状態にあったから真理を探究したのです。どうやって人々を救済するか、それだけを思っていました。ブッダは生涯を通して自分のことを一顧だにしませんでした。無知で利己的で狭い心を持つ人間がはたしてブッダの偉大さを理解できるでしょうか？」

仏教の特徴

ゴータマ・ブッダが創設した仏教は、世界の主な宗教の一つです。インドで始まりましたが、さまざまな大陸にその翼を広げてきました。仏教がこれまで繁栄し続けてきた理由の一つは、その合理的で実践的な道とシンプルさからです。仏教は特定の神様を重視するのではなく、識別を通して自分の苦しみを取り除くことでニルヴァーナに到達するように信者に助言しています。

仏教は全く盲信的ではありません。国から国へと広がりを見せる時も、主ブッダの名のもとに血が流されることは全くありませんでした。アルダス・ハクスレーは記しました。「世界のすべての偉大な宗教の中で、仏教だけが、迫害、弾圧、宗教裁判をせずに道を作りました」

仏教では、カーストで制約される場所はありません。ブッダの指示により、虐げられた低いカーストの人々は、王や君主と同等の地位と権利を見いだしました。また、仏教では女性の状態も改善されました。ブッダは尼僧の僧団を設立し、生活がうまくいくように、適切なルールや規定を設けました。なぜならブッダは人の性別が霊性の発展の障害になるとは考えなかったからです。

以上、仏教のおもな特徴の一部をご紹介しました。

基調講演

「スワーミー・ヴィヴェーカーナンダと日本」　パート２／２

谷口智彦博士

慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授、安倍晋三内閣参謀参与

調べるうち、このときの録音と称するものが、いくつか YouTube にアップロードされているのを知りました。中には、雑音を混じらせて、さも当時の録音であるかに思わせるものもあります。

でも、このころ、何分もかかる演説をその場で録音する技術は、まだ世に出ていません。そしてラーマクリシュナ・ミッション自体が、世に出回っているスワーミージーの肉声なるものは、みなフェイクだと、明確に否定しているのを知りました。

ところが、です。

当時書かれた文献の中に、「骨相学（Phrenology）」の観点から、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのことを分析したものがあるのに出くわしました。そこに、スワーミージーの身長がどれだけで、体重がどのくらいだったか、断定的に記している箇所があるのを見出したのです。

この説を信じるならば、という、限定をつけて申しますが、1895 年 8 月に世に出たある論文が語りますところ、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの身長は、5 フィート 8.5 インチ。体重は、170 ポンド。ついでのことに、頭の回り（頭囲）が 21.75 インチだったとも文献は言っていて、この辺になりますと、ほんとに頭にメジャーを当てて測ったのではあるまいし、信憑性に疑問を抱かせます。

身長と、体重だけは、この際、信じてみることにしましょう。これは、メートル法に直しますと、身長 174 センチ、体重 77 キロだった、ということになります。

私はかつて、福沢諭吉が大男だったと聞いて、調べてみたことがあります。

福沢という人、身長は、これは信用できるのですが、173 センチだった。

当時、日本の男性の平均身長がどれだけだったかを別途調べ、173 センチとの、比例を計算します。その比例を、現代日本男性の平均身長――それはちょうど、私の背丈と同じくらいなのですが、――にあてはめますと、もしも福沢諭吉がいま生きていたら、どのくらいの身長だったか推定してみることができますね。福沢は、いま生きていたら、大リーグで二刀流を開花させ活躍している大谷翔平と、同じくらい。

つまり、193 センチくらいの、それはそれは、大男だったということがわかりました。

だとすると、174 センチ。福沢より 1 センチ高い身長の持ち主だったスワーミージーは、これは、堂々たる体躯の持ち主だった。当時のアメリカ人に、ちっとも負けていなかっただろうと、想像がつくではありませんか。

もう一度、言ってみます。Sisters and brothers of America。さぞよく通る、深い、そして響きのいい、声だったに違いない。私たちは、いま、そんなふうに、想像しておこうではありませんか。頷いて、いただけますでしょうか。

私は、インドがその近代化のごく初期において、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダを持ち得たことの僥倖を、仕合せを、思わざるを得ません。

インドには、のち、もしかすると渋沢栄一の何倍も偉いといっていい実業家が生まれます。国の未来を憂い、産業の振興に熱心な企業家が、生まれ、その 1 人が、今日のタタ・グループを築くこととなるジャムシェトジー・タタです。私は今度、スワーミー・メーダサーナンダが書かれた本、それは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダと岡倉天心を通じて日印関係の成り立ちを描いたすばらしい著作ですが、それを読みました。そして、その本を通じて私は、日本から初めてアメリカに向かったスワーミージーが、やはりアメリカに向かおうとしていた当時 55 歳のジャムシェトジー・タタと、横浜で出会い、同じ船に乗り合わせていたのを知って、奇跡のような偶然だと思いました。

と、そんなエピソードがあったとはいえ、タタが有名になり、インド企業とインド経済が世界の注目を集めるのは、まだもっと先のことです。

世界がインドの政治指導者を知るよりも前に、経済人を知るよりも以前に、もちろん、軍人について知るよりずっとずっと前に、世界はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダを知ったのです。急いで付け加えると、同じくカルカッタの出身で、スワーミージーより 2 歳年長のラビンドラナート・タゴールが、1913 年、アジア人として初めてノーベル賞を文学で受章することで、後に続きます。でもそれは、シカゴ万国宗教会議の 20 年後のことです。

どちらにしても、私は世界中に有力な国は数多くありますが、精神指導者 2 人を同時に輩出し、その力で世界にその名を知らしめた国など、インドのほかになかったと思うのです。

中国には、魯迅がいたではないか、という方があるかもしれませんが、魯迅は日本語で考えた人で、果たして中国の文学者だったと言えるかどうか、疑わしいところがありますし、万人の魂を直接揺さぶるほどの力は、魯迅にはありませんでした。

インドの人々よ、幸いなるかな、です。世界広しといえども、インドは、

インドだけは、軍人でも、政治家、実業人でもなく、精神的指導者の存在によって、世界に知られるところとなりました。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの宗教的、精神的指導力で、世界から畏敬の念を集めたのです。

そう考えてみますと、あの、最初の5字。Sisters and brothers of Americaが、どれほど歴史的な意味をもつ5字だったか、改めて、私は、戦慄とともに気づくのであります。

それは、たった5つの言葉で、永遠に記憶されるスピーチとなったという意味で、これまた、空前にして絶後のものだったと言うべきでありましょう。

また、さらに、思います。スワーミージーや、タゴールの打ち立てた影響力がなかったとしたなら、インドは、独立に向けた精神的土台を、十分に築き得ただろうか、ということであります。

何よりも、ここに集った皆さまが、スワーミージーの力がいまに生き、脈々と受け継がれていることの、動かぬ証拠ではありませんか。スワーミージーは、惜しくも39歳の若さで世を去ります。来年、2022年は、亡くなってから120年の節目を迎えます。

しかしその影響力は、衰えるところを知りません。911の事件が、彼が説いた宗教間の寛容について、多くの人が思い出すキッカケとなったことは、既に述べました。いま、精神世界に安寧の拠り所を求めようとヨーガに興味を抱く人ならだれしも、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの偉大な足跡に、思いを致さざるをえません。再び申しましょう。彼を持ち得たインドは、幸せなるかな。

1893年9月のシカゴについて、再び申し上げて、私の拙い話を締めくくろうと思います。

当時の新聞に、Religious Intelligence、日本語にすると、「宗教情報」と訳せるような題名のものがありました。その専門紙が、シカゴの会議が終って間もない1893年10月5日付の紙面に、万国宗教会議について、しめくくりの感想記事（Final Impressions of the World's Parliament of Religions）を載せています。

記事は、こう言います。No one was more popular with the people at large than Swami Vivekananda。スワーミージーくらい、集まった人たちから人気を博した人物は、ほかにはいなかった、ということであります。

しかし同じ記事は、非キリスト教世界から最も多くの代表を送ったのは、

日本だったことを伝えています。仏教は 5 つの宗派が代表を立て、シカゴに送っています。神道の代表も、白装束に烏帽子という独特の衣装を着て、壇上に並びました。

再び思い出すと、ときは、1893 年。大日本帝国憲法発布から 4 年、第一回帝国議会開会からは、3 年。翌年は日清戦争で清を打倒しようかというころです。

当時日本の仏教界は、廃仏毀釈とキリスト教の浸透というショックからようやく立ち直り、世界に向けて自己主張しようと意気盛んでした。わたしは浄土真宗の家に育ちましたが、この宗派は、国際舞台に出ていくうえで、いちばん積極的だったそうであります。

同じ記事によると、中国は、その存在感のなさにおいて目立ったようで、上り坂の日本、落ち目そのものの清国と、両者の差は、ここでも明瞭でした。

鎌倉に、円覚寺という臨済宗のお寺があります。その管長は、釈宗演。この人も、1893 年、まだ 33 歳の若さでシカゴに行きます。そして、世界に向かって初めて、禅とは何かを説くのです。禅が、漢字の禅から、ZEN になった瞬間だったと、いまに伝わります。

このとき、釈宗演は、演説を 2 度、しています。その英語訳をつくったのが誰だったかというと、これが、そのとき 23 歳だった、かの、鈴木大拙だったのです。

やがて、釈宗演がシカゴでつくった知人の招きによって、鈴木大拙は米国に渡ります。渡ってからは、いやおうなしに、仏典の英訳をなりわいにするに至ります。世界とは、小さい。歴史とは、不思議な偶然に満ちています。

これがもしなかったなら、鈴木大拙は、世界に向かって禅を説き、仏教の何たるかを説く偉大な伝道家として登場することなど、なかったかもしれないではありませんか。

くだって、1960 年代。ビートルズがインドの精神世界に魅せられたと同じころ、米国のビート世代は、ZEN に傾倒します。

1893 年のシカゴは、インドばかりか、日本にも、大きな影響を残したことがわかります。こうして見ることによって、私たちは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダを、まるで同時代人でもあるかのように、身近に感じられようというものではありませんか。

スワーミージーと日本には、そのほか、どんな関わりがあったのか。もっとお知りになりたい方は、S スワーミー・メーダサーナンダ師の本を、どうぞお読みください。アメリカ大陸にわたる前、スワーミージーは、日本で 2 週間を送っています。いままで、それがどんな滞在だったのか、解き明かした人は誰もいませんでした。今度、スワーミー・メーダサーナンダ師が、初めてそれを試み、克明に明らかにしています。英語の文章は、極めて平易。エピソードに富み、ページをめくる速

度も進みます。

そのことを述べまして、私の話を終えたいと思います。

ご清聴、まことに有難うございました。

「日印関係の話
現代のパイオニア：スワーミー・ヴィヴェーカーナンダと岡倉天心」
スワーミー・メーダサーナンダ

皆さま、

ヴァルマ閣下、印日関係についての書籍の公式な公開をありがとうございました。また谷口教授にもスワーミージーについてのすばらしいスピーチで、この本へのコメントを頂きましたこと、ありがとうございました。本の著者として皆さまと分かちあいたいことは山ほどあるのですが、時間の制限により、内容を絞ってお話させていただきます。

私は日本に住むインド人の僧侶であり、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの信者であり、岡倉天心の崇拝者という立場から、互いに深く知り合い、印日交流の懸け橋としてパイオニアとなった両者について、お互いの国を訪問や、彼らの交流関係について深く研究する義務があるのではないかと考えるようになりました。およそ十年間の調査と研究の結果、原稿が出来上がり、神の恩寵により昨年末にアドヴァイタ・アシュラマというインドのラーマクリシュナ・ミッションの主要な出版センターから一冊の本として出版される運びとなりました。

この出版のために労を厭わず手助けして下さった日本の信者の方々やインドの友人への最大の感謝の念に堪えません。特に長年の信者であり私たちの英字紙の編集者であるロニー・ハーシュ氏と上智大学名誉教授、シリル・ヴァリアト神父にはこの本の編集にプロとしてご尽力頂きました。

ベンガル語、英語、日本語で様々な種類の原資料、出版されたものもされていないものも調べました。それによってスワーミージーの日本訪問や、岡倉のインド訪問、両者の関係などについてこれまでほとんど知られなかった事柄や、まったく未知だったことをこの本で提供できることになりました。

日本に長く住んでいる者として、この素晴らしい国とこの国の人々の多くの優れた性質について私は非常に尊敬し深く理解しています。しかしながら、本日は、この本のテーマについて調査し研究している期間に私が発見した、改善されるべき問題についてお話してみたいと思います。

まず、第一にインドと日本の人々の交流を効果的に促進していこうとするならば、まず早急にやるべきことがあります。それは、日本の学校教育においてインド文明と文化について提供する情報量を格段に増やすことです。現在の高校生が学ぶ『倫理学』の教科書には様々な文明や世界の宗教が紹介されていますが、西洋文明とキリスト教、イスラム文明とイスラム教ばかりが扱われています。同じ教科書でのインド文明とヒンドゥ教の情報量は非常に乏しく、しかも扱われているのは仏教です。それだけでなく世界的に著名なインド人は数多くいるにもかかわらず、ほとんどの教科書にはガンディーの名前だけが記載されています。詩人ラビンドラ・タゴールの名前すら登場していません。これは深刻な欠陥であり、改善されるべきことです。

第二点目として、岡倉天心は1902年にインドを訪問しましたが、これはもともと京都で予定されていた宗教会議にスワーミー・ヴィヴェーカーナンダを招待するためでした。岡倉はこの訪問でスワーミージーと彼の弟子たちと広範囲にわたって非常に親しい関係を築きました。しかし、残念なことにこの事実はほとんど知られていないのです。ごくわずかな例外を除き、印日関係と岡倉天心のインド訪問について知識のある人達でさえも注目していません。今回の出版により前述の出来事への認知度が高まることを期待します。

第三点目は、岡倉天心について書いた著者のほとんどは彼のアメリカでの滞在を非常に重要視し、アメリカでの事柄の記述については細やかに多くのページが費やされていることです。一方、岡倉のインドとの深い関わりについてはほとんど注目されていません。しかし、我々の調査でわかったことですが、岡倉のインド滞在は9か月間にも(1902年の1月から9月まで)およびました。これが重要でないはずがありません。アメリカでの滞在とは異なり、岡倉は完全にインド人とインドの生活様式に自分自身を一体化させていました。大変興味深い彼の一体感と彼の生涯における大きな出来事であるインドでの生活について、この本では150ページを費やして記述しています。岡倉の2回目のインド訪問は、1912年でとても短い滞在でしたが、こちらも重要なものでした。

ついでながら、印日関係に関する限り、岡倉は例外的な日本人だったといえるでしょう。彼ほどの名声のある日本人で他にインドを訪問し、長期に渡って滞在し、インド人と一体になり、またスワーミー・ヴィヴェーカーナンダや、ラビンドラナート・タゴール、アバニンドラナート・タゴールなど著名なインド人と交流した日本人は他にはいなかったといえるでしょう。

第四点目は、インド人は、清潔さ、規律正しさと秩序ある行動、義務に対する責任感など日本人から多くの学ぶべ

きことがありますが、日本人も霊的な価値、普遍性、寛容さなどインド人から学ぶべきことがあります。ヴィヴェーカーナンダは本質的に霊的な人間でありましたが、多才で多くの独自の発想に恵まれた天才でした。この彼の資質がマハートマー・ガンディー、レオ・トルストイ、ロマン・ロランなど東西問わず多くの偉人たちを惹きつけました。ヴィヴェーカーナンダが霊的な存在であるからといって、彼や彼の思想に無関心でいることは、愚の骨頂と言えるでしょう。この本は日本人がヴィヴェーカーナンダから何を学べるかを提言しています。

最後に、この本がインドと日本の交流に関心のある方々に両国関係の歴史を深く知るための一助となり、様々な活動によってさらにその絆を強くしていくことに役立つならば、両国と人類の文明をより豊かにすることに貢献することでしょう。それでこそこの本の出版の目的は果たされるといえるでしょう。

ご清聴ありがとうございます。ナマスカール！ありがとうございました。

来賓講演

「ネタージ・スバース・チャンドラ・ボシュとインド独立運動を支えた日本人志士たち」　パート２／３

田中健之（たなかたけゆき）氏

歴史作家、岐阜女子大学南アジア研究センター特別研究員、ロシア科学アカデミー、東洋学研究所、客員研究員

日本政府による国外退去命令は撤回されたものの、イギリス政府による追及は、一九一八（大正七）年まで続き、暗殺から逃れるためにボシュは日本各地の十七箇所を転々と移り住む逃亡生活を送りました。

この間、彼は相馬家の長女俊子と結婚し、正秀と哲子という一男一女に恵まれ、日本国籍に帰化しました。しかし俊子は、夫の亡命生活で隠れ家を転々とする無理が祟り、一九二五（大正十四）年、体調を崩して肺炎となり逝去してしまいます。

日本に帰化して、中村屋の一員となったボシュは、日本に純インドのカレーの味を広めたいとして、中村屋に祖国の味を伝授し、日本最初のインド式カレーが、日本人の口に入りました。

これが今日、中村屋のレストランや缶詰、レトルトで我々が食べることができる、「中村屋のカレー」です。中村屋のレストランメニューには、このカレーを「恋と革命の味」と記してあり

ます。
　ラシュ・ビハリ・ボシュは、後に「中村屋のボシュ」言われ、親しまれる所以です。
このように、インドの独立革命家を通して、日本の在野の志士たちの間に、インドに対する同情とイギリスに対する憤りが広がりました。
インドの独立革命家とその思想について、日本の志士たちの間にそれを伝えたのは、フランス人のポール・リシャールという人です。
　一九一四(大正三)年、アジア的な文化と宗教に惹かれたリシャールはミラ夫人と共にインドに旅立ちます。
　彼は、インド独立運動の精神的リーダーで、インドの伝統的な思想を求道したオーロビント・ゴーシュの弟子でした。リシャールはゴーシュの指導の下で、ヨーガの実践を学んでいます。
兵役の義務のためにフランスへの帰国を余儀なくされたリシャールは、フランスへの帰国を余儀なくされましたが、健康上の理由で間もなく除隊し、再びアジアを目指しでフランスを後にします。
一九一六(大正五)年、インドに行く途中で、リシャール夫妻は日本に立ち寄ります。
彼らは最初、数か月間、日本に滞在する積りでしが、結局約四年間、日本に滞在し続けました。
同年十月、彼らは東洋の碩学と謳われた、大川周明と初めて対面しています。
　リシャール夫妻を通してオーロビンドの真価を深く知ることになった大川は、著書『復興亜細亜の諸問題』で、「彼は単にインドをイギリスの政治的羈絆より解放し、又はその経済的壟断を打破するを以て究竟の目的とするものでない。彼の明朗透徹なる理性、秋霜烈日の如き意志が、常に真面の敵として戦う所のものは、実に英国的精神そのものであり、英国的文化そのものであり、而して一切の非インド的精神そのものである」
　と記しています。
　また、リシャールは、一九一九(大正八)年五月に、早稲田大学において、「亜細亜の真人アラビンダ・ゴーシュ」と題した講演を行いましたが、この中で彼は、次のように述べています。
「この統一の裡に、亜細亜に対する将来の約束がある。更に高き文明、更に完全なる文明の約束がある。亜細亜各国がその有する最上のものを以て実現すべき生命と文明の約束がある。日本の裡に亜細亜の一切の偉大なる思想が包括せらるるであろう」
　オーロビンドの精神と重なり合っていたリシャールは、西洋文明の行き詰まりを警告し、正義の国日本が、アジア解放に尽力することを願っています。
　リシャールは、大川周明をはじめ北一輝、頭山満、そして内田良平らとも親交を深め、思想的な影響を与えている。
　内田はリシャールに黒龍會が発行す

る英文機関誌『The Asia Review』は、ポール・リシャールが編集に携わっていました。

革命家ネタージ・スバース・チャンドラ・ボシュ

日本に帰化しても尚、中村屋ボシュは、インド独立運動を活発に行っていました。

彼は、A・Mナイルをはじめラーマ・ムルティーら日本にいるインド独立運動家たちと協力し合って、インド独立運動を活発化させます。

特に昭和初期、イギリスと対立を強めていた日本政府や軍部と協力関係を結んだ中村屋のボシュはインド国外における独立運動の有力者の一人となった。

一九四一(昭和十六)年十二月八日、日本は米英に対して宣戦布告をし、大東亜戦争が勃発しました。

中村屋のボシュは、大東亜戦争をインド独立の絶好のチャンスだとして捕え、東京・赤坂の山王ホテルに「インド独立連盟」の看板を掲げました。

大東亜戦争が勃発すると、反英独立戦に立ち上がろうとするインド人は、中村屋ボシュを中心とする在日インド人のグループのみならず、東南アジア各地にすこぶる大勢いました。

シンガポール陥落の頃には、その勢力はすでに数万人の独立軍が組織されました。この独立軍は、日本陸軍の特務機関長である藤原岩市少佐が組織したＦ機関を中心に集まったグループでした。Ｆ機関の″Ｆ″とは、「フリーダム」のＦ、「フレンドリー」のＦ、そして「藤原」の頭文字のＦという意味です。

元英印軍の捕虜を中心に組織された独立軍は、「インド国民軍」と命名されました。

モハン・シン大尉を中心とする彼らの独立意識は旺盛で、彼らは日本との協力を欲した一方、日本の満洲や中国に対する政策に対しては厳しい批判を公然と提示しました。

そして日本が真にアジア解放戦争を聖戦だとするためには、インド人に対する独立対等権を日本軍が確認することを彼らは要求しました。

また彼らは、インド独立連盟とインド国民軍の正式な代表者となった、中村屋ボシュに対して、彼があまりにも日本人に親しみ過ぎて、日本に対して妥協的であり過ぎるとして非難しました。

中村屋のボシュに対する反対派は、当時、ドイツのベルリンに亡命中だった、ネタージ・スバース・チャンドラ・ボシュに強く期待して、その来日を熱望しました。

日本人の中には、古くから親しみの深い、中村屋のボシュをあくまでも支持して、その指導権を固めさせたいと切望する者が有力でした。

しかし中村屋のボシュは、稀に見る

東洋的君子な人でした。彼は進んで、自分よりも年少で、新進気鋭のネタージの来日を求め、自分はネタージの下で、ただインドのために戦えばいいのだと主張しました。

スバース・チャンドラ・ボシュは、「ネタージ」つまり「指導者」と尊称されるインドが生んだ、偉大なインド独立革命家です。

実は、中村屋のボシュは、一九二〇年代からネタージを高く評価しており、次のように述べています。

「スバース・チャンドラ・ボシュ氏はインド独立運動の顕著なる指導者であり、インド青年から非常に尊敬されている」

ネタージは、イギリスに妥協的であったマハートマー・ガンディーを「本心に於いて英の讃仰者である」と痛烈な批判をする一方、イギリスからの「インドの完全独立」を訴えるネタージを「完全独立」を貫く「非妥協的統率者」の下で、「インド独立の目的は、達するであろう」と、述べています。

ネタージは、一八九七（明治三〇）年一月二十三日のベンガル州カタック（現在のオリッサ州）に、父ヤナキナアス・ボシュ、母、ブラグハビーチ・ボシュ間に生まれました。

ちなみにラシュ・ビハリ・ボシュやラビンドラナート・タゴールもベンガルの出身です。

ネタージの父は、ベンガル州議会議員で、かつ弁護士、検察官として法曹界で活躍した方で、イギリス人により過酷な扱いを受けていたインド人の人権を擁護することもしばしばでありました。

彼はこの父親から大きな影響を受けたと後に語っています。

才媛である母は、教育熱心かつ宗教に深い関心を持っていた人でした。彼女はネタージが子供だった時に、インドの二代叙事詩であるラーマーヤナとマハーバーラタを暗唱させ、スピリチュアリティーとインドの伝統的な価値観を教えました。

ネタージは母の影響の下、少年時代からスピリチュアルなものを探求することに魅了され、ジャガンナート神の壮大な寺院のある神聖な都市プーリーを訪れるサドゥスや巡礼者に魅せられ、そしてヨーガや神秘主義へ傾倒しています。

十五歳の時にネタージは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの本に出会います。

「ヴィヴェーカーナンダが私の人生に入ったのは、私が十五歳になったばかりです。その後、自分の中で革命を引き起こし、すべてをひっくり返らせた」

とネタージは述べています。

そして彼の人生観は、ヴィヴェーカーナンダとラーマクラシュナの哲学的な思想によって形成されました。ネタージの道徳的な生活感、問題や危機に対する彼の立ち振る舞いや行動規範をヴィヴェーカーナンダとラーマクラシ

ュナは決定しました。

カルカッタ大学の入試を第二位で合格したネタージは哲学を専攻し、この頃、愛国心に目覚めます。

卒業後、彼は父親の希望で、英領インドの公務員試験の準備のためにイギリスに渡り、ケンブリッジ大学に入学します。この時彼は、イギリスがどのような特性を持って強国となったのかを理解するために、イギリス人の友人と交わり、イギリス人の組織力、勤勉さ、時間厳守、自信などを知ることができました。

ケンブリッジ大学卒業後、インドに帰国したネタージは、極めて難関である英領公務員試験を第四位で合格しました。

しかしネタージは、英領インドの公務員になることを辞退してしまいます。

何故ならば、祖国インドをイギリスの植民地という桎梏から解放すべく、独立運動に身を挺する覚悟を固めたからです。

それ以降ネタージは、マハートマー・ガンディーの指導の反英非協力運動に身を投じます。

しかし、ネタージ自身、

「ガンディーの武力によらぬ反英不服従運動は、世界各国が非武装の政策を心底から受け入れない限り、高遠な哲学ではあるが、現実の国際政治の舞台では通用しない。イギリスが武力で支配している以上、インド独立は武力によってのみ達成される」

という信念を抱いており、ガンディーの非暴力主義には強く反対していました。

一九二四（大正十三）年、ネタージは、カルカッタ市執行部に選出されるも逮捕・投獄され、ビルマのマンダレーに流されました。

釈放後の一九三〇（昭和五）年に、ネタージは、カルカッタ市長に選出されましたが、彼の独立思想とその影響力を危惧した英印植民地政府の手により免職されてしまいます。

その後もネタージは、インド国民会議派の左派、急進派として、「インドの即時独立」を求めて活躍し、その勢力を伸ばしました。

組織の分裂を心配したガンディーは、ネタージを一九三八（昭和十三）年度の国民会議派議長に推薦しました。

ネタージは、インド独自の社会主義「サーミヤワダ」を提唱し、若年層や農民、貧困層の支持を集めた。

これに自信を持ったネタージは、翌年の国民会議派議長に立候補しました。

議長は、ガンディーの指名によって決定されることが慣例でしが、ネタージは、党内初の議長選挙を実施しました。この選挙でネタージは、ガンディーが推薦するボガラージュ・パタビ・シタラマヤに大差をつけて勝利しました。

この行為によってネタージは、ガンディーからの支持を失い、それによって、ガンディーを支持する国民会議派

の多数派からの支持も失いました。

ネタージの動きを危険視した党幹部は、彼に不信任を突きつけたため、ネタージは議長辞任を余儀なくされます。さらに三年間役職に就けない処分も受けました。

議長退任後にネタージは、前進同盟を結成し、独自の活動も開始しました。

またネタージは、統一インドとしての独立を望んでおり、独立派内でのムスリムとの対立が激化する中で、パキスタンが分離して独立する事態を憂慮していました。

これによってネタージは、政府から危険人物と見なされ、第二次世界大戦が勃発するとカルカッタの自宅に軟禁されてしまいます。

一九三九（昭和十四）年九月に勃発した第二次世界大戦開戦は、つまりイギリスとドイツの開戦であり、ネタージは、「待望のイギリスの難局がついに訪れた。これはインド独立の絶好の機会である」と述べ、インド独立のための武装闘争の準備を開始しました。

被搾取民族にとって独立達成こそが先決であり、反英諸国のイデオロギーについて論争する「贅沢な余裕はない」という見解をネタージは持っていました。

一九四〇（昭和一五）年六月、フランス降伏とドイツ軍によるイギリス上陸が迫ったことを知ったネタージは、ガンディーの元を訪れ、広範なレジスタンス蜂起のためのキャンペーンを行うように求めましたが、ガンディーは闘争のための準備ができておらず、現在の蜂起は犠牲が大きいとして、ネタージの要請を拒否しました。

同年七月、ネタージは、大衆デモの煽動と治安妨害の容疑でイギリス官憲に逮捕され戦争終結まで収監されることとなりました。

そこでネタージは、反英諸国の支援を受けて、国外でインド人部隊を結成し、インドに侵攻して民衆蜂起とともにインド独立を達成するという計画を立てました。

計画実行のために脱獄の機会を待ったネタージは、獄中でハンガーストライキを行い、衰弱のため仮釈放されました。

同年十二月、遂にネタージはインドを脱出、陸路アフガニスタンを経由して、ソ連に亡命しようとしました。

当時、ネタージは、インドを解放できる国はソ連のみだと考えていました。

社会主義的思想の点からもソ連に親近感を持っていた。

カーブル駐在のソ連大使と交渉し、モスクワ行きの許可を得ようとしたネタージですが、大使は彼の入国を認めませんでした。

そこでネタージは、イタリア大使アルベルト・カローニの協力を得て、イタリア外交官に偽装してドイツに向かうことにしました。

一九四一（昭和十七）年四月二日、ネタージは遂に、ドイツのベルリンに

到着することが出来ました。

ネタージ・ボシュと日本

「自分は、ネタージの下で、ただインド独立のために戦えばよいのだ」

という、中村屋のボシュの謙虚な提言によって、ベルリンからネタージの来日ついて意を決した日本軍は、作戦を開始しました。

当時、ドイツ政府は，ネタージにベルリン中央部の広大な邸宅を与え、自動車や生活資金も供与していましたが、インド独立運動への直接的な協力には極めて冷淡でした。

それでもネタージは、諦めることなく、ドイツ外務省との交渉を行いました。これを受けて、外務省情報局内には特別インド班が設置され、インド問題の専門家と共に活動できるようになりました。

十一月には外務省によって「自由インドセンター」が設立され、在外公館として認可されました。

同センターは、インドに対する宣伝工作を行う共に、北アフリカ戦線で捕虜となったインド兵から志願者を募り、兵力三個大隊、約二千人からなる自由インド軍団を結成しました。後の第九五〇連隊です。

ネタージ自身、積極的に反英プロパガンダ放送に参加しました。

しかしドイツ政府は、インド独立に対する支持の公式的な表明を拒絶しました。

一九四一（昭和十六）年十二月八日、大東亜戦争が勃発、日本軍によるイギリス領マラヤへの攻撃、すなわち「マレー作戦」や香港攻略戦における日本軍の勝利とイギリス軍の敗北を知ったネタージは、

「今や日本は、私の戦う場所をアジアに開いてくれた。この千載一遇の時期にヨーロッパの地に留まっていることは、全く不本意の至りである」として、日本行きを希望して駐独日本大使館と接触するようになりました。

マレーやシンガポールを日本が陥落したことを非常に喜んだネタージは、その喜びを駐独日本大使館大使大島浩陸軍中将やベルリン駐在武官山本敏大佐に表明しました。

ネタージは岡倉天心の本を読んでいました。彼の気持ちを日本へと向けたのは、「アジアは一つ」とする天心が著した『東洋の理想』の冒頭に掲げられた”Asia is one.”（「アジアは一つである」という一語でした。

日本軍はやがてビルマに入り、インド国境方面に向かって突進することであろう。インドは正に日本軍の侵入を受ける直前にあると、ネタージは考えました。

そこでネタージは、即座に日本へ行って、インド解放のために日本軍と共に戦闘したいと考えていました。

日本に行くことを熱望するネタージの願いに対して日本政府は、「考慮中」

という対応しか示しませんでした。

日本の外務省や日本陸軍参謀本部はインド情勢に対する分析が不充分であり、ネタージの価値についてほとんど認識していなかったからです。

マレー作戦の後、日本はインド方面への侵攻を本格化させ、一九四二（昭和十七）年四月には、セイロン沖海戦で連合国海軍を破り、インド洋のイギリス海軍を大きく後退させました。

おりしも北アフリカ戦線で枢軸軍がスエズ運河に迫っており、ドイツ側も日本に対して対インド方面作戦の強化を働きかけていました。

ちょうどその頃、同年六月十五日、日本が占領下に置いたシンガポールを拠点に、中村屋のボシュを指導者とする、インド独立連盟が設立されました。

連盟の指揮下には、イギリス領マラヤやシンガポール、香港などで捕虜になった英印軍のインド兵を中心に結成されていたインド国民軍が指揮下に入りましたが、インド独立宣言の早期実現を主張する国民軍司令官モハン・シン大尉と、時期尚早であると考えていた日本軍、そして日本軍の意向を受けた中村屋のボシュとの軋轢が強まっていました。

十一月二〇日、モハン・シン大尉は解任され、中村屋のボシュの体調も悪化したことから、日本軍はインド国民軍指導の後継者を求めるようになりました。

そこで、国内外に知られた独立運動家であったネタージは、その後継としてまさにうってつけの人物であり、またネタージ自身も大島浩駐独大使に強く日本行きを働きかけている時でした。

また中村屋のボシュと共に行動していたインド独立連盟幹部であるＡ・Ｍナイルも、ネタージを後継者として招聘することを進言していました。

しかし陸路、海路、空路ともに戦争状態にあり、ベルリンから東京へ、ネタージが移動するには困難が多かったため、日独両政府は彼の移送のための方法の協議を行いました。

その結果、空路よりは潜水艦での移動の方が安全であると結論が出ていたため、一九四三（昭和十八）年二月八日に、ネタージと側近アディド・ハサンが乗り込んだドイツ海軍のＵボート潜水艦Ｕ一八〇は、ドイツ海軍が所有する最速のＵボート二隻の中の一隻で、二十一ノットを出すことができ、ドイツのキール港を出港した時、潜水艦の乗組員たちには、ネタージとハサンの正体は極秘にされました。彼らは、「一体彼らは何者なのか？」と囁き、「おそらく潜水艦の専門家に違いない」という噂が艦内に広がりました。黒っぽい服と帽子を着用した、肌が浅黒く、黒っぽい鼈甲ぶちの眼鏡をかけたドイツ人以外の外国人は、「得体が知れない感じ」であったと言います。ムーゼンベルグ艦長は乗組員に対して、「二人は、潜水艦ブンガーを建造する単なる技術者で、ノルウェーで上陸す

る」

と説明していましたが、二人はノルウェーでも下船することはありませんでした。

そして艦長は、ノルウェーを出航した時に、初めて二人が、インド独立革命家のネタージとハサンであることが告げられ、二人を無事にマダカスカル海域に連れて行き、そこで日本の潜水艦伊二九と落ち合った所で、二人をそれに乗り換えさせるという任務を説明しました。

U一八〇の艦内は魚雷や食料、それに日本と交換する物資の箱で溢れかえっており、窮屈極まりない狭い生活空間でした。

敵に見つからないようにほとんどの時間が水中潜航であったために、太陽を拝むことができませんでした。

大勢の人員で混みあう暮らし、耳をつんざくエンジン音、悪天候による荒波と霧などの厳しい環境の中、ネタージとハサンは耐え抜きました。

U一八〇がイギリス周辺の海域を航行していた時、ドイツの放送局は、ネタージとヒトラーの会見した放送を流しました。あたかも生放送のような演出によって、ネタージがまだ、ドイツにいるようにカモフラージュしたのです。

四月二十六日に、アフリカのマダガスカル島東南沖で、U一八〇と日本海軍の伊号第二九潜水艦が会合し、翌四月二十七日、ネタージらは、日本潜水艦に乗り込みました。

日独両国の潜水艦は、約百メートルまで近づいて停船、伊二九が砲を撃って、ロープをU一八〇に渡しました。

するとボートに乗ったネタージとハサンが、そのロープを伝って渡って来て、無事に潜水艦を乗り換えることができました。

ネタージとハサンはずぶ濡れになって、伊二九に移艦しました。そこには、寺岡大佐の他、艦長の伊豆中佐以下の温かい心を尽くした歓迎が待っていました。

伊二九でネタージ等は士官台寝室の下段が供せられ、洗面や更衣は司令室を使用しました。食事は予め準備した嗜好品などを、乗員用以外に加えて調理されました。

ネタージは、艦長伊豆中佐以下の士官たちとも、食事中その他の機に触れて気軽に談笑しまたが、彼の高邁なる見識は、皆を感動させ、自然に畏敬と親近感をネタージに持つようになりました。

ネタージ自らも、伊二九の中で、深く日本人たちの友情を感得していました。

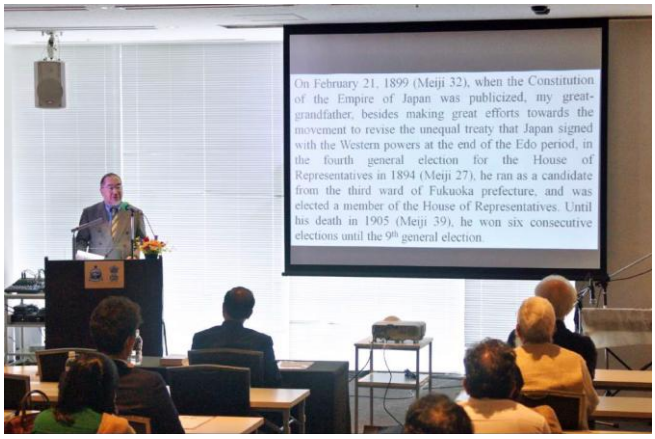
離艦に当りネタージは、

「この潜水艦で旅行したことは非常に欣快事であった。日本帝国政府の好誼に対して感謝に堪えない。航海の初めから、司令はよく吾々を全く家庭に在る思シュウセイ、お庇で終始親愛と温情との雰囲気に包まれた。艦の乗員全

部。特に司令が吾々に与えられた総ゆる好誼に対し、茲に満腔の感謝を捧げる。
　この航海は終生忘れ難き、幸福かつ誇りに満ちた記憶として残るであろう。そして吾人はこれが勝利と平和との道程の第一歩たることを決定的に立証するに至るべき確信する」
　後に艦長伊豆中佐は戦死を遂げ、ハサンとドイツ語で話し相手を努めた加納軍医長は、戦後、戦犯の被告にされ刑死しています。
　五月六日、潜水艦はスマトラ島北端に位置し海軍特別根拠地隊指揮下のサバン島（ウエ島）サバン港に到着しました。
　現地には山本敏大佐がネタージを迎えに行きました。伊二九が桟橋に着くと、ネタージは山本大佐に駆け寄って抱きつくと、
「私はこの喜びを、天地、神に感謝する」
　と言いました。
現地で休養を取った後にネタージらは、日本軍の航空機に乗り換え、五月十六日、遂に東京に到着しました。
一九四三(昭和十八)年五月十六日、東京に到着したネタージは、帝国ホテルに滞在して、東條英機首相との面会を待っていましたが、なかなか東條英機首相との面会は叶わず、苛立ちを募らせる日々を過ごしていました。この間彼は、学校、病院、工場、兵営、軍港などの見学に時間を費やしました。
当初、東條首相は、ネタージに好意を持っておらず、そのために直接会談の日程が、先延ばしにされたと言われています。
東條首相との会見前、杉山元陸軍参謀長と会見したネタージは、開口一番、
「戦争の勝利はもう日本の勝利に決まったようなものである」
　と述べました。
　しかし当時の日本は、ガダルカナル方面で苦戦している最中で、到底、日本が戦争に勝利できる情況にはありませんでした。
「日本はインドに兵を出すのか否か？我々はインドへ行って戦って、そこへ一歩足を踏み入れて烽火を挙げなければ独立はできない」
　という趣旨の話をしましたが、苦戦する日本の実情を踏まえた杉山参謀長の回答にネタージは到底、満足しませんでした。
ネタージと東條首相の会見が実現したのは、六月十日になりました。
ネタージの挙措、言動、そして端正な風格は周囲を圧するものがありました。ネタージに対して、熱誠溢れる理智の閃きが強く、その論理は純直、真摯なる東條首相は、心の琴線に触れ、ネタージに対して首相は完全に魅せられ、その先入観を覆しました。
ネタージを通してインド人およびインドに対する東條首相の、従来の考えは見事に是正され、即座に数日後の再会を約束しました。

また、大東亜戦争の責任者である東條首相の正々堂々たる態度に感動、感銘しました。

［パート 2 は以上です。パート 3 は 8 月のニュースレターに掲載予定です。
※田中健之様から頂戴した原稿を掲載させていただきました。
（固有名詞など、ニュースレターの表記に準じて変更しました。)］



忘れられない物語

今、花をあげよう

リー M. ホッジス

閉じた眼で白薔薇は見えない、
　冷たくなった手で白薔薇はつかめない、そうだろう；
止まった息で白薔薇から漂う甘い香りを
　かぐことはできない。
死、という夢想を越えた静けさ、
　それは地上の子らの天の授かりもの；
人生とは誰かを助けることができる
　とき、
だから、今、花をあげよう！

ここに苦闘、努力がある
　ここに不安、涙がある；
今がその時
　困惑顔、心配、恐れを鎮めるのは、今。
閉じた目に親切な言葉が何になる？
　止まった心臓に深い誓いが何に
　なる？
死後には何も役に立たない、
　だから今、花をあげよう！

優しい一言、会釈；
　心のこもった握手、笑顔　－
それが大きな重荷を
　軽くしてくれる花。
旅が終わった人には
　何も役に立たない；
逝く人が何を持って逝けるというのか？
　おお！　今、花をあげよう！

幸せな心の庭に咲く花、
　愛の精神で摘まれた花；
花、地上の花は
　この世の反映。
そうした贈り物が、
　どれくらいみんなの人生に息づく恵みとなるか、
言葉ではあらわせない、
　だから今、花をあげよう！

今月の思想

祈りとは、神との友情の親密な交換に
ほかなりません。
…アヴィラの聖テレサ

発行：日本ヴェーダーンタ協会
249-0001　神奈川県逗子市久木 4-18-1
Tel: 046-873-0428
Fax: 046-873-0592
Website: http://www.vedanta.jp
Email: info@vedanta.jp